The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	バウハウスとデザイン思想
Author(s)	高安, 啓介
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 15-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67709
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第２回デザイン関連学会シンポジウム　報告

バウハウスとデザイン思想

高安啓介／意匠学会／大阪大学

13：00　開始
　開会挨拶｜講演者紹介｜藤田治彦
　基調講演｜バウハウス創設百年｜宮島久雄
　マルセル・ブロイヤー 理性と感性｜
　　藤田治彦（意匠学会）
　手が頭脳になるとき｜
　　小山明（芸術工学会）
　コメント｜松岡由幸（日本デザイン学会）
　コメント｜面矢慎介（道具学会）
　ディスカッション
　バウハウス創設百年記念催事について｜
　　杣田佳穂（ミサワバウハウスコレクション）
　閉会の挨拶｜塚田章（意匠学会会長）
17：00　終了
　懇親会　京都工芸繊維大学プラザ KIT

９月30日に京都工芸繊維大学においてデザイン関連学会合同のシンポジウム「バウハウスとデザイン思想」が開催された。デザイン関連学会は，意匠学会・日本デザイン学会・芸術工学会・基礎デザイン学会・道具学会によって構成され，今回の会合は，意匠学会が担当した。バウハウス研究で知られる宮島久雄氏がはじめに基調講演「バウハウス創設百年」をおこなった。バウハウスの活動期間は1919年から1933年までと長くはないが，以後の長い歴史に光をあてるお話だった。なかでも，バウハウスが去ったあとヴァイマル校舎およびデッサウ校舎はいかなる運命をたどり，各校舎にはどんな施設が置かれていたのか。バウハウスの所在地だった，ヴァイマル・デッサウ・ベルリンの三都市にはそれぞれ資料を管理している団体があり，2019年の100年祭に向けて共同で作業をしているという。

意匠学会からは，藤田治彦氏（大阪大学名誉教授）が「マルセル・ブロイヤー 理性と感性」と題する発表をおこなった。ブロイヤーは，バウハウスの椅子の仕事においても，アメリカの建築の仕事においても，一方において理性の側面である力学的「構造」をもとめ，他方において感性の側面である視覚的「構成」をもとめ，両者を調停しようとした。ブロイヤーが台形（トラペゾイド）を重視したのは，力学的「構造」にかなった三角形と，視覚的「構成」にかなった長方形と，両方を合わせもつからである。

芸術工学会からは，小山明氏（神戸芸術工科大学）が「手が頭脳になるとき」と題する発表をおこなった。2045年問題としてコンピュータが人間の能力を超えるシンギュラリティが指摘されるが，1980年代から「環境の機械化」は進んでおり，バウハウスのヒルバースアイマーの都市計画においてその問題がすでに先取りされているとみる。現代のデザイン教育は，前近代・近代・近代以降の三つの層をたがい関係づけながら取り込むのが肝要だとした。

日本デザイン学会から松岡由幸氏（慶應義塾大学）がバウハウスを受けて現代のデザイナーが考えるべきことについて発言をおこない，道具学会からは面矢慎介氏（滋賀県立大学）がアノニマスデザインの観点からバウハウスが日本でなぜ盛んに言われてきたのかと疑問を投げかけた。議論に先立って，司会の高安啓介（大阪大学）が４つのポイントを説

明した。① バウハウスには個性豊かな人間が集まっており，短い歴史のなかで方針の変化もみられるので，多様性にも目を向けたい。② 多様性を統一していたのは総合芸術の考えであり，多様性の根底にあったのは普遍主義の考えだった。③ バウハウスはその普遍主義もあってアジア諸国にも影響をあたえた。④ バウハウスを回顧するだけなく現代性を問いたい。

参加者を交えての議論では，最初にバウハウスは日本だけで有名なのか日本ではなぜ有名なのかが問われたあと，芸術の問題，政治の問題，教育の問題，技術の問題，経済の問題，というように話が推移していった。この多面性こそまさにバウハウスの議論をなお活発にしているのだと確信させるような展開だった。もしかりにバウハウスに忠実であろうとするならバウハウスに忠実ではありえない。科学技術の発達のなかでデザイン活動がいかに社会に資するのかを前向きに考える態度こそが，問われている現代性かもしれない。

藤田治彦氏

小山明氏

面矢慎介氏

松岡由幸氏